佳作

# ちがっても「同じ」

別府市立南立石小学校六年　甲斐　紗

「障がい者！」

と、クラスメイトから面と向かって言われました。

この時の私は、悔しさより悲しさが勝って何も言い返せませんでした。

私は生まれつき左利きで、小さい時からよくめずらしがられていました。でも、自分自身は特に周りの人とちがうと感じることはなく、自分とほかの人に変わりはないと思っていました。

何年か前に学校で、障がいについて考えるための特別講座がありました。その講座で使うプリント集が事前に配られました。私は、そのプリント集の表紙を何気なく見て、目を疑いました。そこには、どのようなことが障がいに当てはまるか簡単に書いていて、その中に「左利きの人」と書いてあったからです。

その時に、クラスメイトが、

「左利きって障がい者なんだ。」

と、口にしているのが聞こえました。そして私に向かって、

「障がい者！」

と、言ってきました。わたしは、どうして、と思いました。普段使う手が右手

か左手かというちがいがあるだけで、周りとちがいはないのに、と思い、悔しかったし、ショックでした。

次の日に、特別講座が行われ、その中で左利きについて話がありました。確かに、日常の中で、文字やはさみなど右利きの人が使いやすいように作られていて、不便だと感じるものもありました。これが、私が初めて周りとのちがいを感じた瞬間でした。

この出来事によって、私は、「人を見かけで判断してはいけない」という言葉は大切だと思うようになりました。例えば、耳が聞こえない、目が見えない、手や足がうまく使えないなど、人と少しちがう部分がある人の、その一部分だけで判断してしまうことが、気づかないうちに相手を傷つけてしまうかもしれません。「普通の人と少しちがう部分がある」と、周りの人が思っていても、その人からしてみれば、それが普通なのかもしれません。普通は人によってちがいます。そうした人に普通をおしつけるのではなく、尊重する考えを持って、相手を認め寄り添ってあげてほしいし、寄り添っていきたいと思います。そのほんの少しの行動で救われる人も必ずいるはずです。

人とちがうところがあっても同じ人なんだと、少しでも多くの人の心の中に、この言葉が届き、おたがいを尊重し合えることが、いろいろな人と関わっていくうえでの大切なことなのではないかと思います。